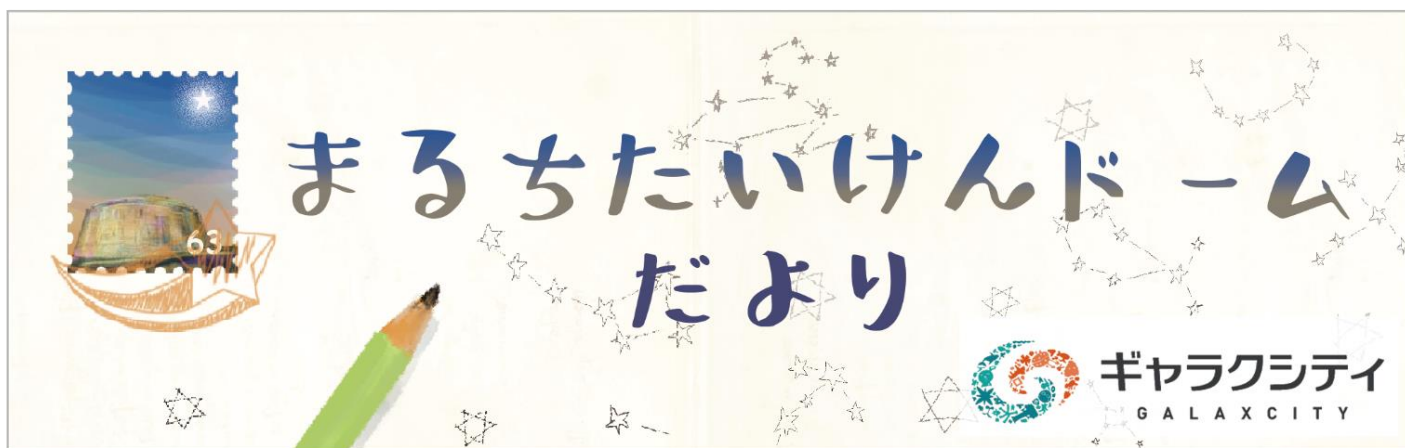
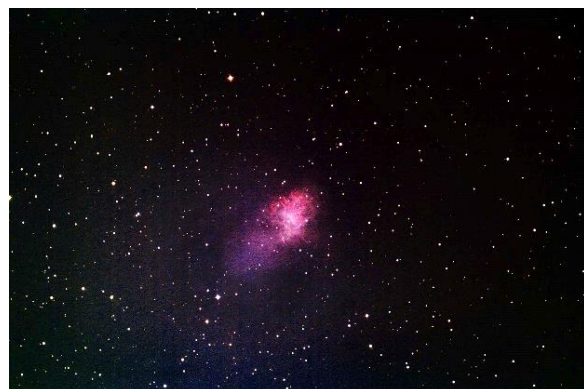




かに星雲シリーズ:その1 秋の夜長はかに星雲の勉強でもしよう

秋が^ふ更けてくると、東の空にすばる（プレアデス星団）などの冬の星座の星々が昇^{のぼ}ってきて、夜空が一気に賑^{にぎ}やかになります。プラネタリウムでは目立つ星座の話を先にしますので、おうし座の角の先の目立たない天体「かに星雲」にまで話が及^{およ}ぶことはあまりありません。でも、かに星雲は天文学の歴史の中で何度も第一線に躍^{おど}り出^{まれ}た希な天体なのです。「まるちたいけんドームだより」では、4回に分けて「かに星雲」を取り上げていこうと考えています。



かに星雲 2020年11月13日
疋田純之解説員 撮影

かに星雲は、17世紀フランスのメシエ^{すいせい}が彗星と見間違えそうな天体のリスト（メシエカタログ）の1つ目に記載^{きざい}した天体です。そのためM1と呼ばれることがあります。19世紀にアイルランドのロス伯爵^{はくしゃく}がカニの甲羅^{こうら}に見えるスケッチを残しています。そのため「かに星雲」（Crab Nebula）と呼ばれるようになりました。さらに、この天体は実は超新星^{ちょうしんせい}の残骸^{ざんがい}であるということが分かったのは20世紀に入ってからです。藤原定家^{ふじわらてい か}のメモ、それを海外に紹介した日本のアマチュア天文家・射場^{いば}氏。それを見つけたヨーロッパの天文学者達。そこからやってくる不思議な電波^{でんぱ}（パルサー）を見つけた女学生ジョスリン・ベル。それを研究してノーベル賞を取ったヒューイッシュと長編時代小説^{ちやうへんじだいしやうせつ}のようにつながっています。

2020年11月13日記（解説員：田部一志^{かいせついん たべいっし}）